

国際文化学シンポジウム「死者の国際文化学—飛鳥、ケルト、フィンランド—」開催報告

主催：「死者の国際文化学」実行委員会

後援：日本国際文化学会

2024年2月18日（日）、近畿大学において国際文化学シンポジウム「死者の国際文化学—飛鳥、ケルト、フィンランド—」がハイブリッド形式で開催された。

本シンポジウムは前日の2月17日にイベントとして明日香村のエクスカッションを開催した。寺院と古墳をめぐる学びを踏まえた本会は、死者と生者の両世界のあいだに目を向けることで国際文化学の議論を拡張することを目的とした。

第一報告では高橋梓（近畿大学）が「飛鳥を歩き、ケルトを想う—堀辰雄、プルーストー—」において、日仏の小説作品の比較を通じて、古墳文化や巨石文化を生死の境界線と捉える考察を展開した。

第二報告は木原誠（佐賀大学）による「此岸と彼岸/事実と虚構の〈際〉、ケルト文化」である。ここではケルト神話の死生観が取り上げられ、生死の連続性が示唆された。

第三報告では田中佑実（北海道大学）が「死者と生きる今昔—フィンランド北カレリア地方 死者のカルシッコの事例から—」として自然と死者の結びつきを見出すことの意義が主に文化人類学的手法に基づき提示された。

以上の三つの報告を受け、コメンテーターとして藤田賀久（多摩大学）が主に仏教の死生観から、次いで松井真之介（宮崎大学）がキリスト教の煉獄思想との関連において議論を拡張させた。

質疑応答では対面とオンラインの参加者が自由に意見を交換した。

本シンポジウムでは、死という不可視の領域を想定し、世界の中に生死の境界線を見出すことの文化的意義をめぐる議論を人文学の方法論に基づき展開したこととなる。報告者たちの分析は、神話やアニミズムの現代的な意味を再検討するものでもあり、今後の国際文化学に新たな展望を拓くこととなったのではないだろうか。

（高橋梓）